

つがるの昔っこ (昔話) 2 /

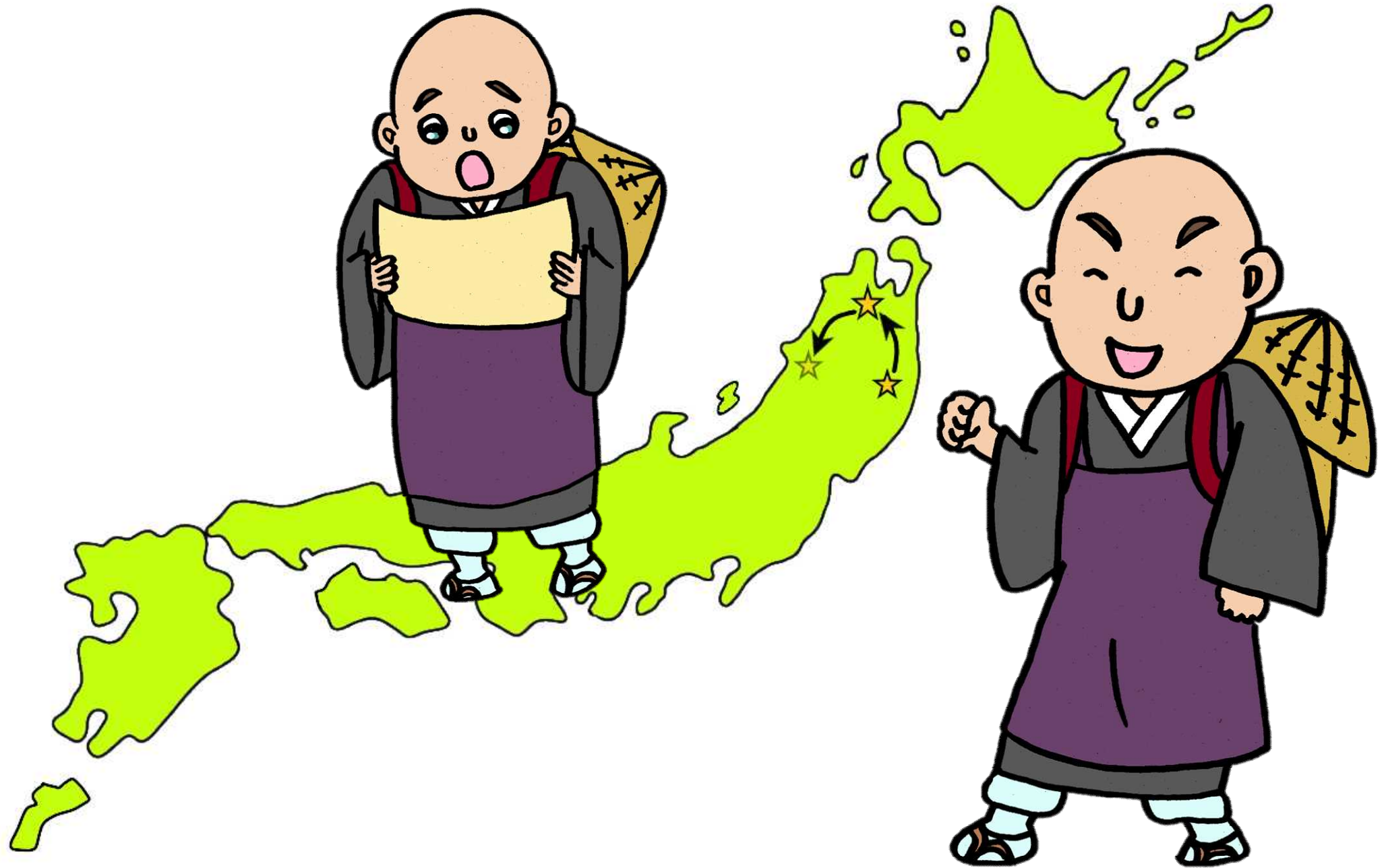
鼓の歌 (津軽弁)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト、カラーリング
:やざわ ゆな

昔むがし、一人の歌詠みの坊さん居であたど。この坊さんせ、歌詠みながら
はるばる旅して北国の津軽さ来たど。

南部盛岡ば抜けで津軽さ入って、今度（こんだ）秋田の方さ行くべど思って、
西の方さ西の方さど山路（けんど）通って行ったきや、でっただ瀧さ出だど。



その瀧あ、なもかもでつけえ瀧でせ、ろお、まるで大鼓だけんた音たでで
流れ落ちであたど。

あんまり見事だ瀧だどごで、しんばらくそごさ居で、それがら筆と懐紙ば出して、
スラスラど一首しただめだど。



それがら又、しばらく行ったきや、日暮れできた。困ったなあ、どへばいいべなあと思って歩いてらきや、ずっとむこうさポツラツと灯（あがし）こ見えだど。

ああ、こした山奥にも家コあるんだ。いや助かった助かったと思って、足ば早めで、その家コさ行って、ホトホトど戸こ叩いだど。



したきや中から一人の爺様出で来た。

『わしは、歌詠みの僧ですが、旅の途中で、日が暮れてしまいました。どうか今晚一晩お宿を貸していただけませぬか』てしたど。

爺様『ああ、そんだがそんだが。こした山奥で何ももでなしは出来ねばって、泊めでやるんだば何もかまわね。さ、さ、中さ入れへ』
坊さんば入れだど。



その家さは爺様ど婆様ど、めんこいめらしこど三人居であたど。
見れば山奥の暮らしで粗末だものば着てる人達であたばて、どこかこう、気品のある家族であつた。

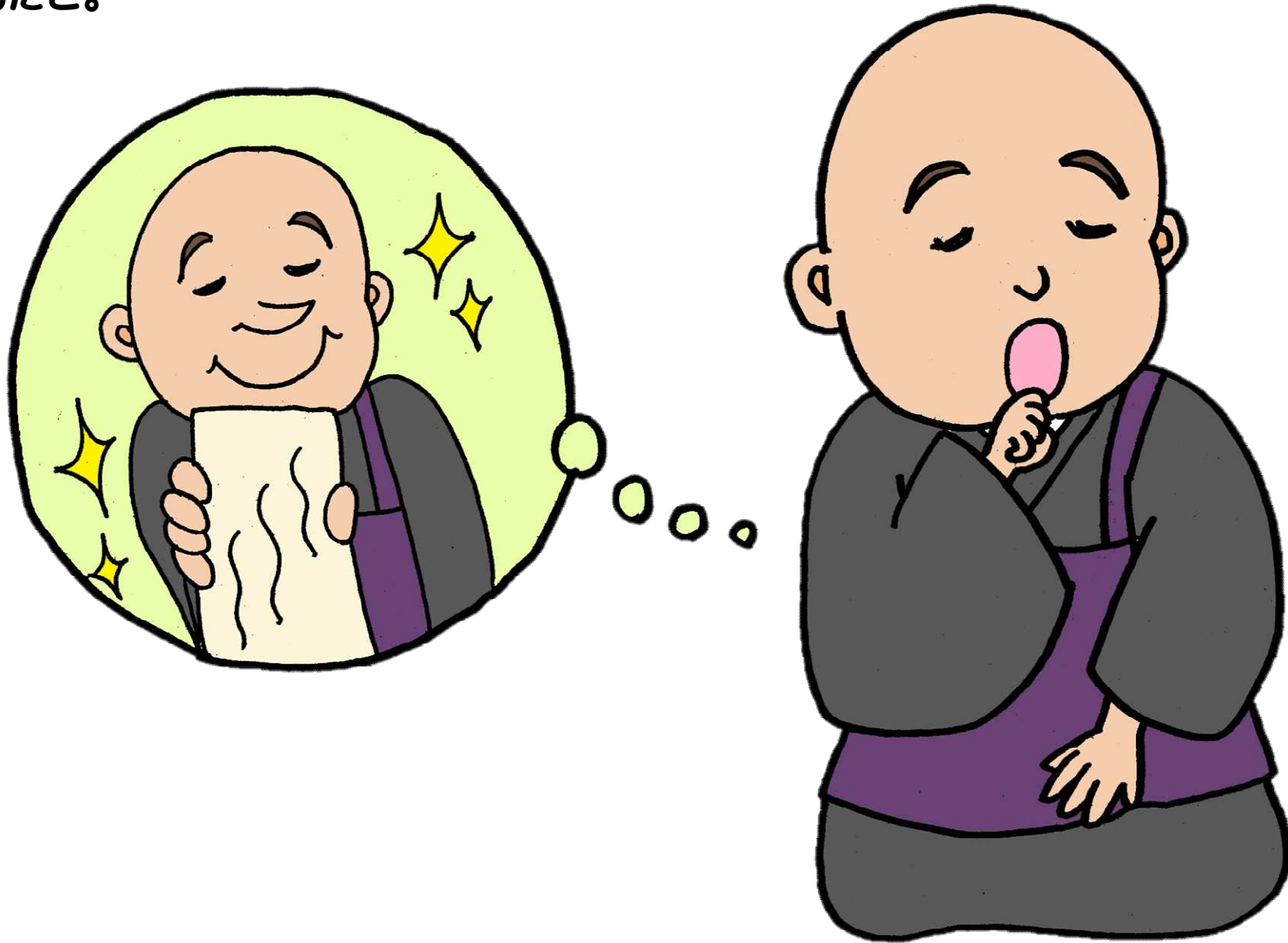
爺様『あんだ、どごさ行って来した？』

坊さん『鼓の瀧を見に行ってきました』

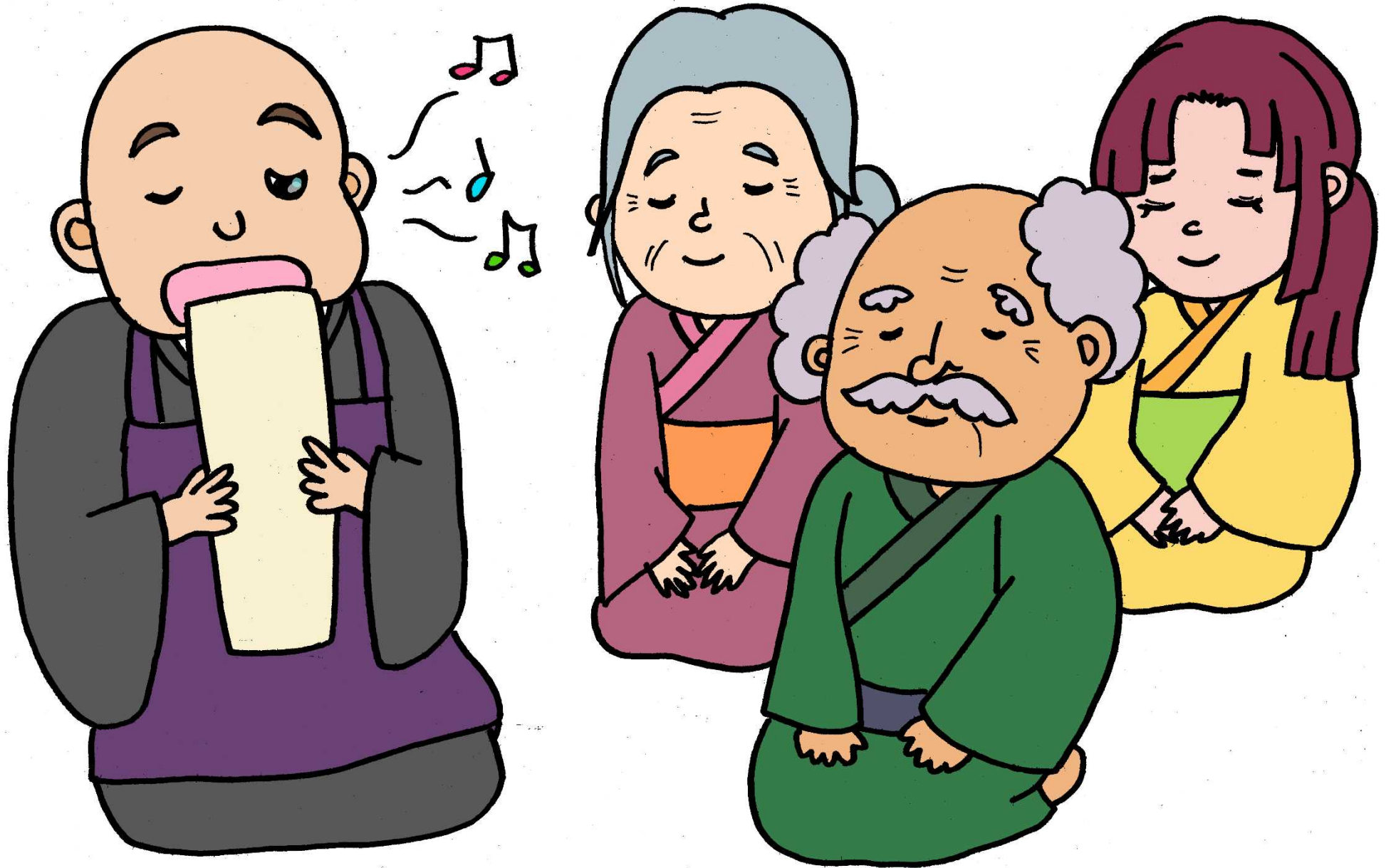
『ああそうですか。それはまあ山奥の方で、大変であれしたねし。で、いい歌コでも詠まれましたが？』て聞いた



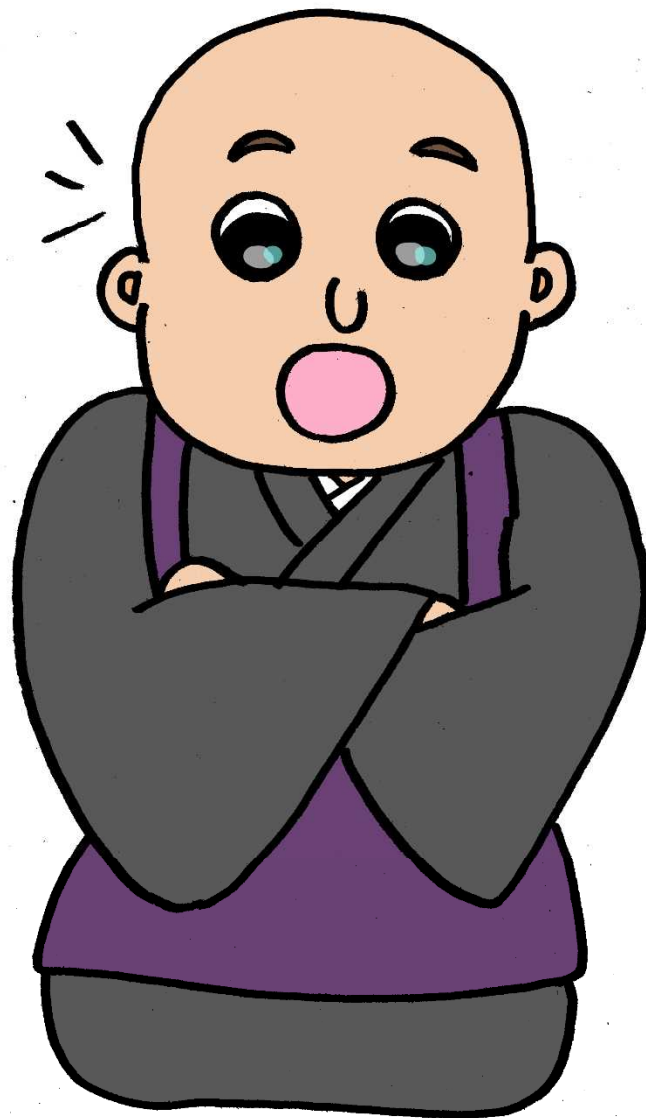
この歌詠みの坊さん、自分の歌もまあ、相当だもんだと内心思っていたもんだとごで、『オッホン』て咳払いして、『まあ、一つできました』
『あれあれ、そんですが。どうゆう歌こでしょうが？ぜひぜひ聞かせで下さいへじゃ』
坊さん『では』てして、おもむろに懐がら懐紙ば出して、さきた瀧のどごで作った歌ば詠んだど。



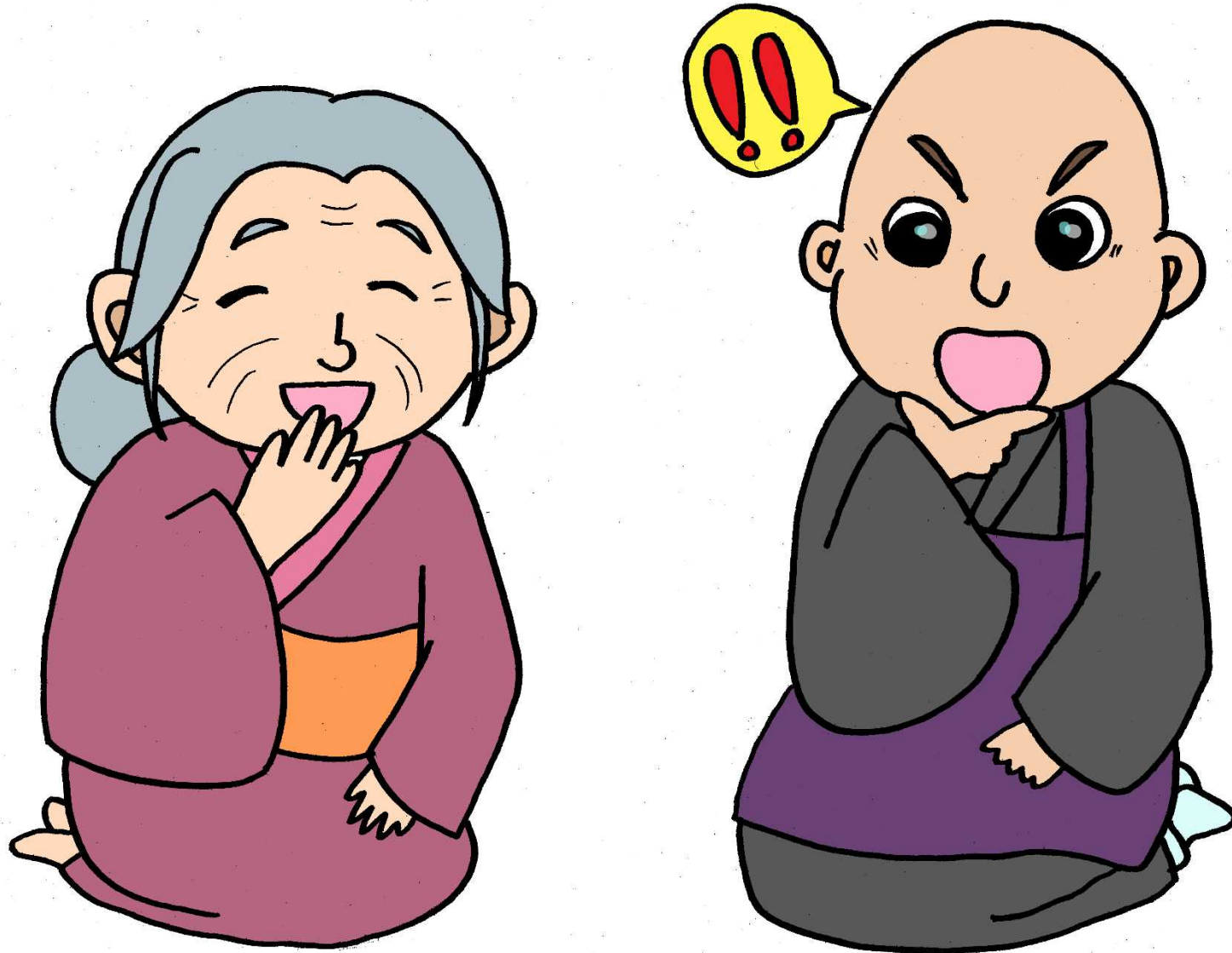
〈伝え聞く鼓の瀧へ来てみれば岸边に匂うタンポポの花〉
『・・・と、まあ、こんなもんですな』て言て、心の中では、こうした山奥の年寄りど
小娘っこさ、わしの歌ば詠んで聞かせでも、わがるわけあねえべど思ってたど。



したきや、爺様、『ああ、なるほど。まあいい歌こ出来だねし。したばって、我だばちょっと直すどごがある。というのはし、鼓ずものはほれ、音こ聞くもんだ。したはんで〈伝え聞く〉ではおもしろぐごえへん。そごは〈音に聞く〉て直したらどんだべな』
『ああなるほど、そうですか』て直してみだきや、そぢの方、あんべこいい。

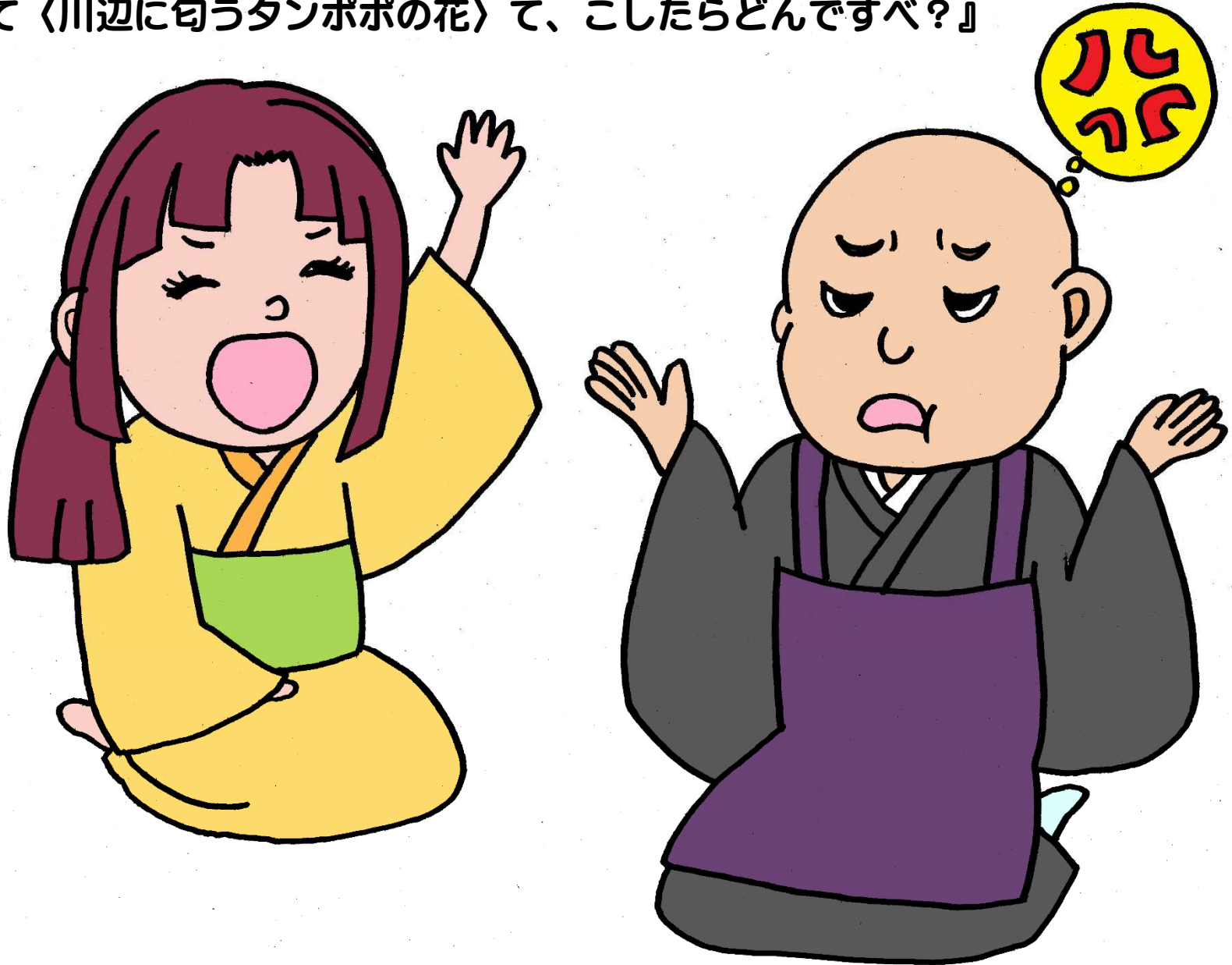


したきや、今度、婆様『私さも一つ直さへで見でけへ。
〈鼓の瀧へきてみれば・・・〉て、あなた様は詠んだけど、鼓ってすものは叩ぐもんでねぐ、
打づもんですべ。したはんで
〈鼓の瀧へ来てみれば・・・〉ではなくて
〈鼓の瀧を打ちみれば・・・〉
と、私だばこうした方がいいんでねべがど思ってし。ホホホ・・・』てしたとごで、
坊さん〈来てみれば・・・〉を〈打ちみれば・・・〉て直してみだきや、これあ一段といい。

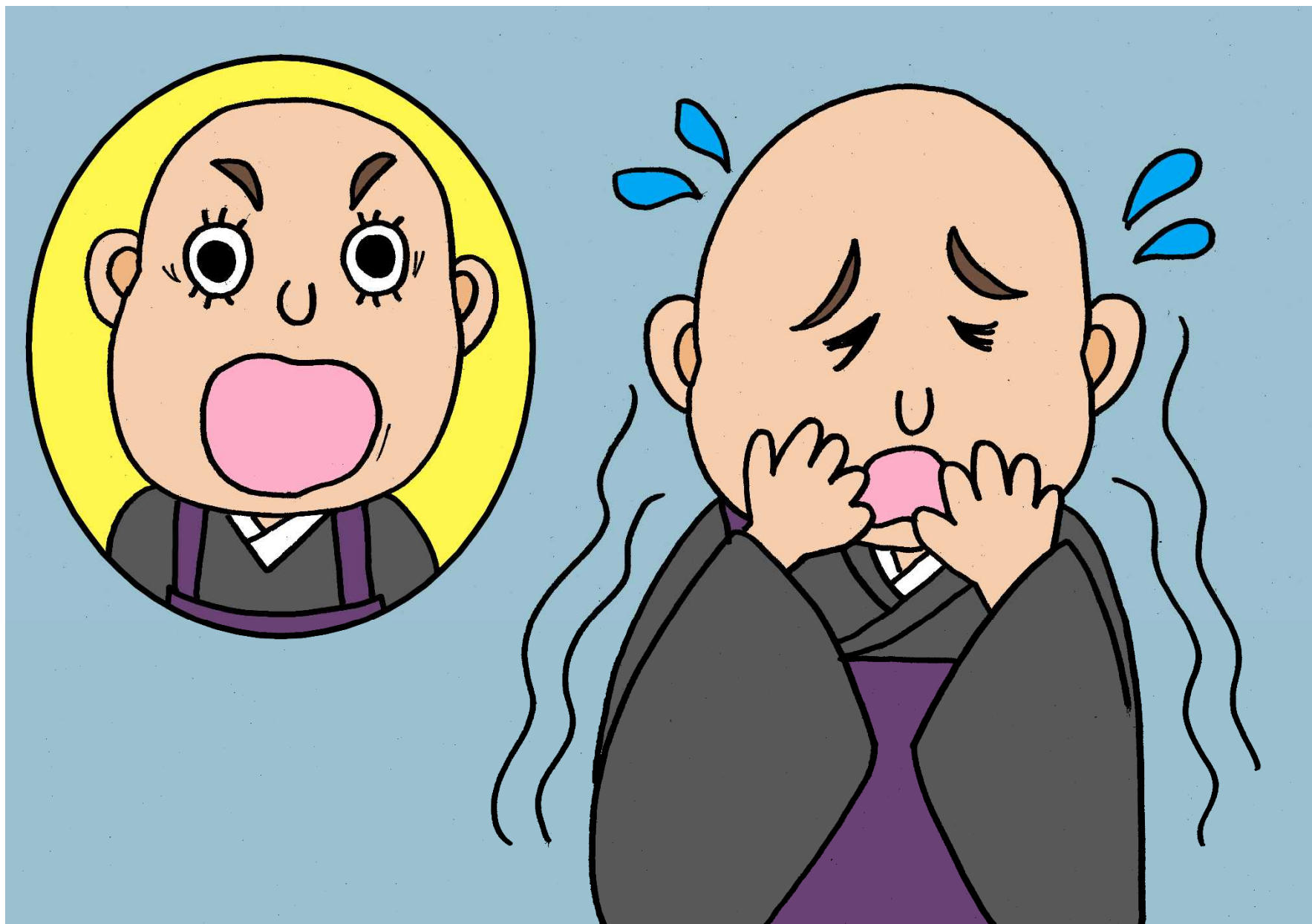


そしたきや、めらしこも『お爺ちやお婆ちや直したんだばて、私さも一言直させで下さい』てした。

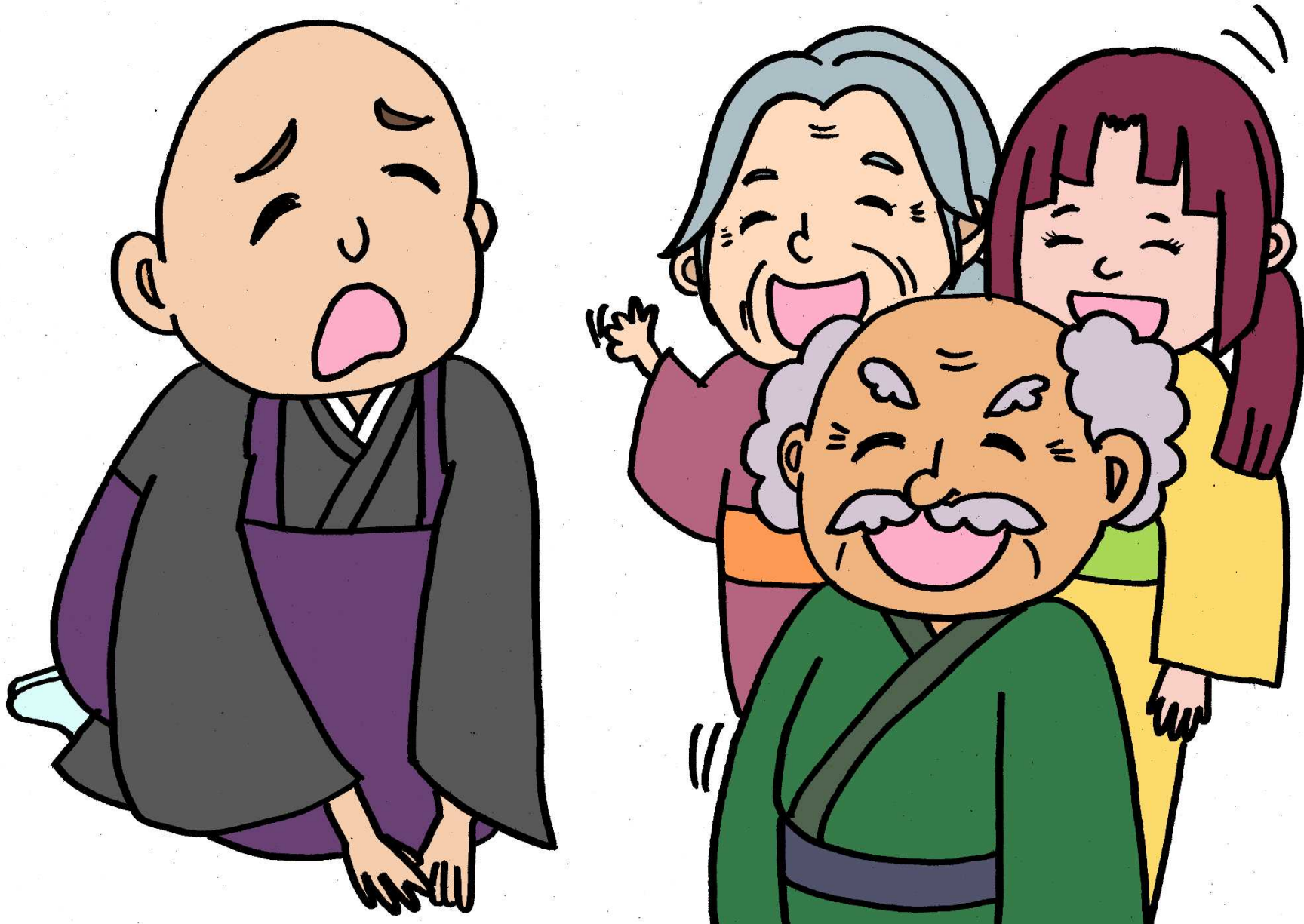
坊さん、今までだば自分よりも年とった人達から直されだんだはで素直に聞げだども、今度、こしたらだ小娘から直させで下さいて言われで、ムツとなって『どごを直すのじゃ』てしたきや、娘こ『〈岸边に匂う・・・〉のどごだけど、鼓は皮で張ってるもんだはで、皮と川をかけ言葉にして〈川辺に匂うタンポポの花〉て、こしたらどんですべ？』



坊さんはなるほどと思って、元歌の
〈伝え聞く鼓の瀧へ来てみれば岸边に匂うタンポポの花〉とば
〈音に聞く鼓の瀧を打ち見れば川辺に匂うタンポポの花〉て詠み直してみだきや、後の方がたんげ
いいもんだとごで、さあ、驚ぐんだがめぐせんだが。これはまだまだ自分の修行は足りねえど思て、
膝ば正して三人の方さ拝んでがら



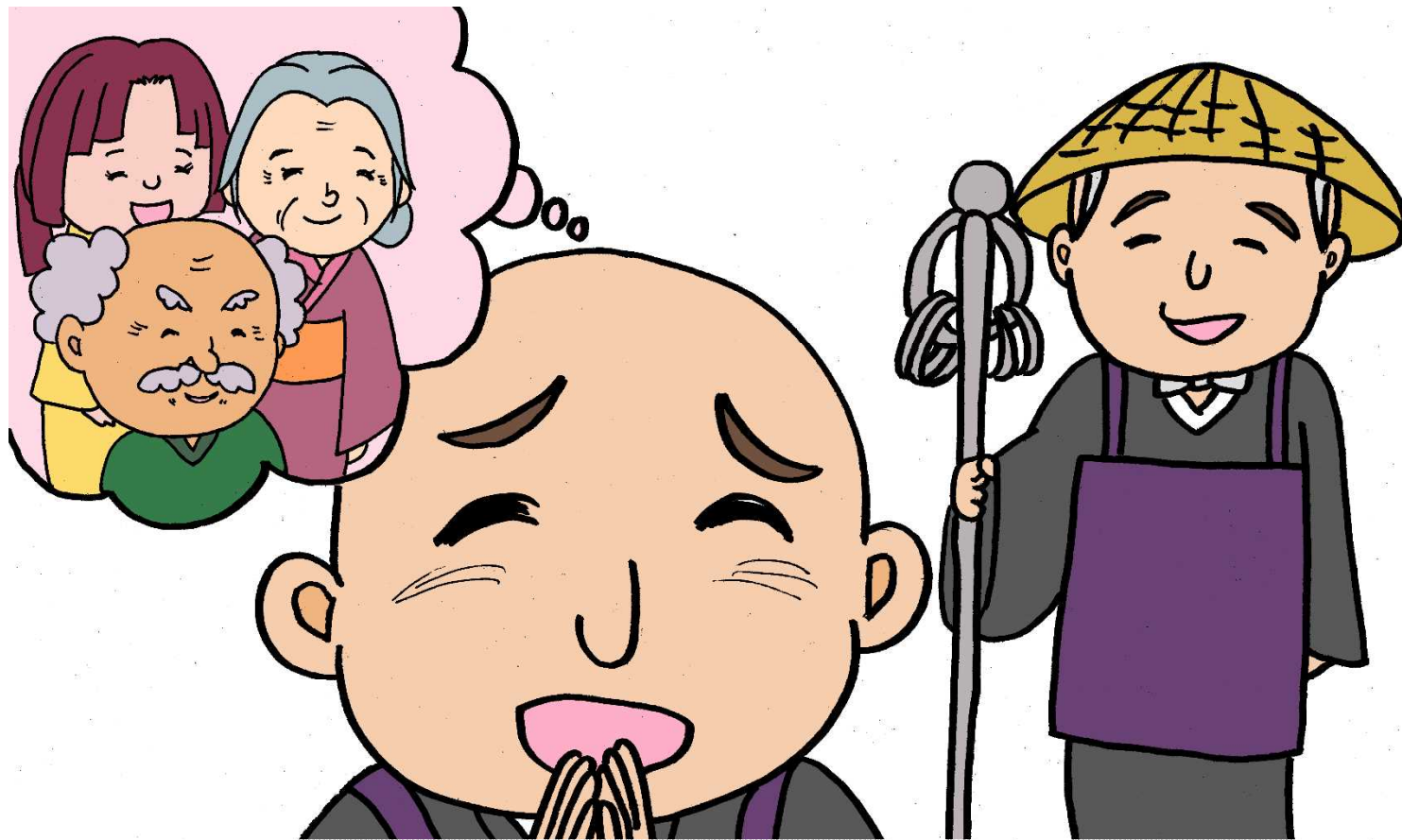
『私はまだまだ未熟者でありました。だけど、こんな北国の山深いところに住んでおられて、これほど見事に歌を直して下さる皆様は、一体どのような素性の方々でしょうか？よもやただの木こりや狩人ではごさいますまい。どうぞお名前をお聞かせ下さい』てしたきや、三人は顔こ合わせて、コロコロど笑ってせ、ふっと立ったきや、そのままスーっと消えて見えねぐなったど。



坊さんどってんして、『あの、もしもし、もしもーし』て叫んだきゃ、そごでパッと目さめだど。
気付いだきゃ、自分はこの瀧のそばで、岩さおっかかって寝であったんだど。
あれあ夢こであったのせ。



坊さん『これは私自身が、少しばかり歌の上手だと思って慢心しかかっていたのを、あの三人の和歌の仙人が夢の中さあらわれで、私の慢心をいましめてくれたのであろう』と
思って、それがら又、旅ば続けながら、いっそう修行に励んでよ、あどがら西行法師て呼ばれる立派だ歌詠みになつたずおんな。



慢心ずものあ、誰の心の中さもひそんでる。少しばかり物の上手になつたはでって、慢心ば外さあらわせばまいねんだせえ。

うぬぼれ心ばギリッとおさえで物事さ励めばそのうちきつと、人から認められるすぐれた人間になる事あ出来る。

少しばかりの上手ば鼻さかげで、これ以上努力さねば、その人の進歩はそこでとちばれこだよー。

さ、へば、ここでとちばれ。